

真っ黒な雄の番犬が二匹いた。胴体は一抱えもあるほど大きく、恐ろしげな顔をしているが思いの他人懐っこくなぜか私によくついた。夕食までの間、近くのマツ林に一人で採集に出る時、宿の主人に断ってこの犬を連れて行った。静まり返った森の中での採集であったし、突然武装した一団が通り過ぎたりして心細かったがこの犬のおかげで非常に心強かった。この付近には気性の荒いロ

バが放し飼いになっているので牧場に入る時には注意が必要である。ロバは温厚そうな顔に似合わず見知らぬ者にはかなり攻撃的な行動を取ることがあるので、彼の存在は非常に有り難かった。実際ロバが近づくと、低くうなっておっぱらってくれるから安心して地衣類の採集に専念できた。

(つづく)

新刊

□Heusden E. C. H. van : **Flowers of Annonaceae : morphology, classification and evolution** BLUMEA, supplement 7. 1992. pp.218. Rijksherbarium, Leiden Dfl 75. 00.

汎熱帯に分布する原始的被子植物の科である。Annonaceae について、科内の花の形態の変異を分類学的見地から研究した論文である。蕾、萼、花卉、雄しべ、心皮、胎座、胚珠等についての詳細な比較観察から、分類に重要な新形質を見いだしている。これら花の形質に基づいて属の範囲づけの議論を進め、従来のいくつかの見解をただしている。結局この科を 20 のグループに分け各グループごとに花の形態の記載を行っている。

Annonaceae の中の分類を勉強するうえで重要な文献であることは言うまでもなく、同時にまた、原始的被子植物の花の構造の多様性を理解するうえでも見落とせない文献といえる。(寺林 進)

□Fahn A. and Cutler D. F. : **Handbuch der Pflanzenanatomie XIII, 3 Xerophytes** pp.176. 1992. Gebruder Borntraeger, Berlin. DM 124.

本書は乾燥、半乾燥、気水地帯に生育する植物の形態、解剖学的特徴における適応戦略に関する最近の知見をまとめて紹介したもので、著者ら自身のオリジナルの研究も含まれている。植物が陸上に姿を現した時から植物たちの乾燥との戦いは始まっており、普通の植物でも体制内には乾燥に対するいろんな工夫がこらされている。植物のなかには、乾燥地帯へと自らの体制をさらに変革しながら分布を拡大していったものもある。本書ではこのような乾燥地帯に適応した植物の形態、解

剖学的特徴を葉、茎、根といった器官について組織レベル、細胞レベルで詳しく紹介している。いかに効率良く水分を取り入れ、体内に保持し、有効に利用できるかが最も重要な点である。例えば、乾燥地帯の植物の葉は柵状組織が多く、海綿状組織が少ない傾向にある。柵状組織が多いほど細胞の表面積が増加し、光合成時のガス交換がすばやく行える。こういった組織の特殊化は、乾燥地帯では、短い期間に降った雨を短期間で有効に使わなければならないことに適応しているという。そのほかいろんな部分で特殊化がみられ、いかに植物がうまく環境に適応してきたかが分かってたいへんおもしろい。(寺林 進)

□浅井康宏 : **縁の侵入者たち帰化植物のはなし** 朝日選書 1993. pp.294 ¥1,300.

帰化植物の調査研究で知られる著者が、これまでに発表したものに新たに書き加えた入門書としているが、内容はかなり密度が高い。とくに外国に帰化した日本植物の振舞いはこれまであまり認識されていないので、帰化植物の理解を深めるのに役立つ、この項には約 80 ページが当てられており、著者の気の入れようが察せられる。もう一つ大きい項目は約 100 ページ 30 種類におよぶ帰化植物の銘々伝で、永年の調査にもとづく知識が披露されている。このほか環境問題と関連して、水生帰化植物の影響について注意が喚起されている。植物の予備知識を持つ者には大変有用な読者で、これからの観察眼を豊かにするだろう。ただ、表題は帰化植物をおしなべて悪者扱いした印象があり、工夫してほしかった。表題の決定は販売政策からの要求が大きい。帰化植物にはもちろん始